（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和５年度　海外派遣研究員研究報告書

令和７年３月３１日

日本大学理事長　　殿
日本大学学長　　殿

所　　属　国際関係学部（国際関係研究所）
資格・氏名　准教授　杉本　宏昭
■本報告書の内容を公表することは了承しております。
（公表可の場合，チェック■すること）

令和５年度海外派遣研究員（　長期　）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　長期

２　研究課題

ヴィクトリア朝視覚文化研究並びにトマス・ハーディの芸術観に関する研究

３　派遣期間　　西暦２０２４年　３月２６日　～　２０２５年　３月２６日

４　派　遣　先　　イギリス、フランス、ベルギー

５　研究目的

ヴィクトリア朝視覚文化の一つである写真は、どのように作家トマス・ハーディ(Thomas Hardy 1840-1928)の芸術観に影響を与えたか、写真に関連する視覚文化の歴史を含めて、その調査・考察を研究目的とする。

ヴィクトリア朝(1837-1901)は、前例のない時代繁栄とともに様々な文化が花開いた時代である。視覚文化もその一つである。特に写真の出現は人々の生活に大きな影響を与えた。同時に、社会における人々の感覚また認識もより視覚を中心としたものとなった。

絵画や文学などの芸術においても写真の影響は大きい。特にリアリズムのコンセプトに大きな影響を与えた。では、リアリズムの小説作法の中で作家活動をしているハーディならびに彼の作品に、写真はどのような影響をあたえたのであろうか。

ヴィクトリア朝視覚文化を考察する上で写真を中心に据え、写真の歴史、ヴィクトリア朝での写真の一般的受け入れられ方、特定学問分野（例えば客観性を重要視する科学における写真の使用など）での受け入れられ方、またハーディ以外の芸術家が写真にいだく考え方を調査する。そしてハーディ小説での写真の用いられ方を、改めてかつ包括的に検証し、ハーディにおける写真とリアリズムの関係の考察をとおして、

ハーディの芸術観を探る。また歴史的に写真の元となる絵画に関しても調査・考察を行う。

６　研　究　概　要

研究概要に関しては以下の 5 点を柱とした。

１）写真の出現から 19 世紀における写真の影響に関して資料文献調査を行う。
２）19 世紀イギリス文学と写真の関係について文献調査を行う。
３）ハーディ小説内における写真の使われ方について調査を行う。
４）ハーディ作品と視覚芸術という視点で写真の元となる絵画に関して文献調査を行う。
５）イギリス、フランス、ベルギー、アイルランドにおいて絵画の現地調査を行う。

７　研究結果・成果

１）に関しては、フランスにおけるダゲールが発明したダゲレオタイプ、イギリスではタルボットが発明したカロタイプがあった。ダゲレオタイプは一回性質の写真であり、また像の周りに陰影が付くことから絵画のように扱われた。カロタイプはネガ・ポジ式で複製（現像・コピー）可能である。このカロタイプは社会の様々な場面で使用された。例えば、ネガを操作し不利益を被る個所を修正すれば理想的な写真となる。このような操作は町の写真館などで頻繁に行われていたことが分かった。よって、写真が被写体の「写し」であるとは言い切れなくなった。また合成写真も頻繁に作成された。よって被写体が、「その時、その場に、いた」という実証性も疑いがかけられることとなった。一方で、写真は、透明な光を通して被写体自体が感光版の上に自らの像を写したものと考えられ、同時に人が介入する余地がないもの、客観性を保証する物、という言説が社会に出回った。また、科学の分野が顕著であるが、写真は、人の「目」よりも歪みや誤りが少ない故に、正確な写しが必要な分野において、例えば図鑑、レクチャー時に使用されるスライドなど、写真は人よりも上位に位置された。

写真は自画像を持たない庶民に爆発的に人気になり、町の写真館は大いに栄えた。自画像だけでなく有名人のブロマイド、またブロマイドの収集なども人気を博した。その他、例えば建築と写真の関係は興味深い。ヴィクトリア朝における人口の都市部への移動により、都市は郊外へと拡張される。同時に新しい建造物が建てられることにより、原風景を残そうとする意識が芽生えた。この際写真を用いて記録された。またゴシック建築のリバイバルが盛大に行われたことにより、もとの建築風景を残そうとする意識が高まった。この点において当時の建築関係の雑誌では写真関係の記事が頻繁に見受けられ、建築と写真の関係性の強さがあった。

〔７　研究結果・成果（つづき）〕

２）においては、写真館を舞台にした小説や、撮影時に写真に映り込んだものに対して写真は見えないものまで見える力を持つと言った迷信を小説に取り込んだもの、合成写真を真の写真と勘違いするもの（例えば幽霊写真など)、小説は写真を取り込んでいった。同時に写真の真正性やカメラ・写真における客観視とはどの程度信用できるのかという疑問が大きくなった。結局のところ、写真における客観性の保証は人々が信じ込んでいる言説であることが明らかになり、小説もこれを取り込んだ。これらの小説は多分に実験的性質をもつものであり、多くの場合短編小説で写真は採用された。

３）ハーディ小説における写真の使用に関して、ハーディは２つのパターンにおいて描いている。まず写真の真正性と客観性の保証に関しては、ハーディもその真正性と客観性に大きく疑問をいだいた。これは第５作目の長編小説 *A Laodecian* において描かれている。次に、写真を見る人が写真に自己の感情を投影するパターンが見られる。むしろハーディはこちらの方が多い。短編である‘An Imaginative Woman’において、写真を見る者は自身の憧れの人物が写る写真に自己の欲望を投射する。またハーディの詩において写真が登場するものも同じパターンである。よってハーディの場合、写真の真正性と客観性への疑問、ならびに写真に見る人の欲望が投影されるがゆえに見る人の隠れた部分が顕在化する道具として、写真を使用していることが分かった。

上記の研究・調査を基に、科学また科学者における客観性とは何かについてハーディ小説との関係を探った。1882 年出版の長編小説 *Two on a Tower* においてハーディは科学者を登場させ、科学の客観性、または科学者は客観性を達成できるかに関して読者に訴えた。結論から言えば、写真同様、科学の真正性と客観性はその言説を成り立たせるものからできており、科学者は客観性を達成できないとなる。この内容に関しては『国際関係学部研究年報』第 45 集（2025 年 3 月）において、「*Two on a Tower*: Swithin St.Cleeve は客観性を達成できるのか?」という題で論文掲載された。登場人物の Swithin St. Cleeve は科学者(天文学者)である。同時に彼は科学者であり天文学者である John Herschell をモデルとして描かれている。Herschell とはタルボットのカロタイプに‘photograph’という名をつけた実在の人物である。写真は天文学まで影響をする。天文学では時代が進むと天体観測に写真が用いられるようになったことも挙げられる。

写真に関してさらに調査と考察を深め、ハーディとリアリズムの関係を現在考察している。ハーディはリアリズムに対し反対の立場をとる。その理由は、端的に言えば、視覚的に見えるものが客観的真実とは限らないからである。さらに時代ではフランスから Emile Zola に代表されるナチュラリズムがイギリスに入り、文学における視覚的、物質的、そしてそれを客観的と考えた文学が流行した。ハーディはこれら文学に反対する。この点過去の論文などの資料では特に 1880 年代以降の傾向として取り

挙げられていることが多い。しかしハーディのこの傾向をさらに探ると、1875 年の自身の「文学ノート」拡張期に見られるリアリズムに関する引用、また『ハーディ伝』でいままで取り扱われてこなかった小説開始前の時期に、ハーディの反リアリズムへの萌芽が見られることが分かった。現在はこの点に関して調査を行っている。

４）ハーディ作品と視覚芸術という視点で写真の元となる絵画に関して文献調査をおこなった。まずハーディは小説家になる前に絵画評論家になることを意識したことがある。そのためロンドン滞在時には National Museum 等に頻繁に訪れ絵画を鑑賞、またノートをとっている。ハーディが鑑賞し考察した絵画の種類は国や時代において多岐に及ぶ。同時に、ハーディは小説において頻繁に画家名を記載し、小説の場面情景とハーディの美術館での絵画体験とを強く結び付けている。初期小説においては、小説全体への効果を考えれば、画家名を小説内に登場させる効果は薄く、よって芸術的に効果はあまり見られない、と専門家内では考えられている。しかし後期小説において、印象派からハーディへの影響が大きくなっていることを考えれば、ハーディは初期小説から、絵画の見方としてその流派的見方と評価というよりも、ハーディ自身の個人の見方（印象）を優先して絵画鑑賞をしていること、またこの意味で初期小説を考察すれば、今まで効果は薄いと考えられていた画家名と場面情景の連想は、ハーディの印象というくくりにおいて、異なった意味合いを持つようになるのではないかと考えられる。この点について現在も調査中である。また反リアリズムの立場をとるハーディの場合、リアリズムの代表たる写真に対抗するものとして絵画が考えられる。絵画は、時代の写真の強い影響もあり写真的傾向を帯びるもののあるが、伝統的に物質的表面の奥に見える対象の本質を描くものが芸術である、また芸術家はそのように描くべきである、というイギリスの姿勢がある。よって一見すれば対象の忠実なる写しのように見える絵画であっても、そこから画家の感情が投射された情景を読みとることができる。ハーディの場合もこの伝統的姿勢を保持しているように考えられる。むしろ写真の影響が強くなればなるほど、写真とは距離をとろうとする姿勢が見られる。この点さらに継続調査を試みたい。

５）イギリス、フランス、ベルギー、アイルランドにおける絵画の調査に関して、イギリスではロンドンにある National Museum, Tate Gallery をはじめ各地の美術館や博物館を訪問した。特に注目した点は、イギリス絵画の歴史的変遷もさることながら、イギリスを代表しハーディにも影響を与えた J.W.M.Turner の絵画である。Turner の絵画はいわゆる物質的な事実を土台として描く絵画とは異なる。それはいわば光と水蒸気の中にすべての物体がまじりあった場面を描くかのようなものになる。ハーディの反リアリズムの視点からすると、物質的な事実の奥に画家が何をどのように見て感じるかを中心として描く点において、Turner に注目したのであろう。またこの視点は、ハーディ芸術の中心たる位置を占めていると考えられる。

フランスでは、ハーディに最も影響を与えたと思われる印象派に関して調査を行った。例えば Marmottan Monet 美術館における Claude Monet の絵画における光の移ろ

い、また Pierre-August Renoir の絵画のように画家の感情が反映された絵画は、ハーディの芸術観という面に注目すれば、Turner の絵画と深く結びついているように考えられる。現在調査中であるが、ハーディにおいては、印象というくくりにおいて、写真に見られるリアリズムに対抗する現実の描き方へと結びつき、またこれがハーディ自身の哲学に結びつくのではないかと想定している。

ベルギーにおける調査においては、イギリスやフランスとは異なり、宗教絵画を中心として調査を行った。宗教と絵画はその布教活動やパトロンという意味で元来切り離すことはできない。聖書の場面を克明に描いた絵画はキリスト教内において人々に多大な影響を持つものである。ハーディの視点で言えば、17 世紀や 18 世紀の絵画は注目される。例えば聖母大聖堂(Onze-Lieve-Vrouwekathedraal)における Peter Paul Rubens の絵画は、聖書の場面を想像力を用いて描いたにも関わらず、光の使い方また色遣いなどの効果により、見ているものがあたかもその場面に出くわしたように描かれているが、同時に、巧みな感情表現により表面の奥に人々が抱く感情をも描き出し、これは見ている人に共感される。つまり画家が表面の奥に描こうとする人間の本質を見ている人が共有することとなる。しかもその本質とは宗教に端を発する感情として人々の間で共有される。そしてこの感情は国や時代を越えたいわばユニバーサルな感情となりえる。ハーディの場合、後期小説において宗教がテーマとして取り上げられる点、また小説内における場面の描き方にも反映されているのではないかと考えられる。現在も引き続き調査中である。

アイルランドに関する調査において、アイルランドの美術、文化、文学など、派遣先であるエクセター大学の図書館の資料が非常に充実していたこと、またエクセター大学の専門家から様々な知識やアドバイスを得ることができ、当初現地を訪問しなければ基礎資料収集や基礎調査ができないと考えていたものが、エクセター大学内において十分調査が可能となった。またこれらにより当初漠然と考えていたアイディアがある程度妥当性を得るのではないかと考えることができたため、アイルランド訪問の必要性は薄れ、訪問を取りやめた。ヴィクトリア朝は中央集権化や都市部への移住が進み地方の独自性がすたれてしまう時代であった。ハーディの視点から見れば、生まれ故郷のドーセット州の独自性がすたれてしまうことと、イギリスがアイルランドを植民地にしてきたことによりアイルランドの独自性がすたれてしまうことが心情的にオーバーラップするのであろう。美術においても民族また地方の独自性がすたれてしまう故に逆にその関心が挙げられる。アイルランドとハーディに関しては先行研究が非常に少ない。今後も調査を継続する。

以　上